とある風紀委員（ジャッチメント）の空間重力操作

ツリー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある風紀委員（ジャッチメント）の空間重力操作

【Ｎコード】
Ｎ４１５８Ｓ

【作者名】
ツリー

【あらすじ】
急遽派遣された空間重力操作のレベル４の力を持った高校生、秋月瑶。
幼馴染と再会し、彼の進む先にあるものは。
（恐らく僕が描いた作品の中で最もグダグダです。それでも興味を持っていただければ幸いです）

プロローグ

「風紀委員（ジャッチメント）ですの。器物損壊及び強盗傷害の容疑で拘束いたしますわ」

学園都市のとあるＡＴＭ。そこに複数の男とみられる人物が強盗に入ったと風紀委員（ジャッチメント）１７７支部へ通報が入った。早速現場へ急行した白井黒子。シャッターが派手に壊され、数人が人質に取られている様だ。

「あぁ！？チッ、風紀委員（ジャッチメント）つうから確認してみりゃお譲ちゃん一人だけかよ。悪い事は言わねぇぜ。さっさと帰んな」

「さっさと帰る為にも大人しくお縄にかかって欲しいものですの」

「てめぇ！」

一気に突っ込んでくる強盗共にも微塵も怯えず、白井は自身の能力、空間移動（テレポート）を駆使して金属矢を強盗の服の隙間に喰い込ませて拘束する。

「ふぅ。ちょろい一件でしたの」

「ちょろいって？それはどうかな？」

「ッ！？」

不意を突かれた白井。銀行に残っていた強盗の一人が背を向けた白井が振り向いた瞬間に拳を突き出した。

「ぐっ！」

その拳を諸にくらって、転がる白井。

「生憎だな。俺達もいつも同じ目に遭うとは限らねぇんだよ！」

再び空間移動（テレポート）を使おうとするが足首を捻ったのか集中出来ない。

「オラオラどうした～！！」

こういう展開の時、大抵は御坂が超電磁砲（レールガン）を使ってくる。いつもならそれを咎める所だが、今この瞬間、不覚にもそれを頼ろうとしてしまった。が、その御坂は何やら私用があるらしいのでこちらに来る可能性はかなり低い。ギュッと目を瞑った。

が、その拳が白井に届く事はなかった。

「グッ！何故だ！何で腕が動かねぇんだよ！」

その光景を嘲笑うかのようにコツコツと足音を立てて一人の人物がやってきた。容姿は高校生くらいだがスラリとした身なりに背中に丁度背中ほどの長さの刀を背負っている。

「いつも同じ目に遭うとは限らないか・・・なら、そのさらに上の対策を風紀委員（ジャッチメント）がしている事も用心しておくべきだったな」

強盗の拳は白井の目と鼻の先にあるがその先に一寸たりとも前へ動かない。

「今の内に」

「え？えぇ、ですの」

何とか態勢を立て直した白井は金属矢を最後の強盗の服の隙間に喰い込ませた。

強盗を全員搬送した。

「ピンチを救ってくれた事には感謝するですの。ですが、あまり一般人が不用意に事件に首を突っ込むのはおやめ下さいまし。全くお姉様といい、貴方といい・・・」

「コレは失礼。僕は一般人に見えただろうか？」

「見えたも何も、その背中の刀を除けば何処から見ても一般人ですの」

「これも見てもそう言うかい？」

そう言いながらポケットから緑色の腕章を取り出す。そう、風紀委員（ジャッチメント）の腕章だ。

「な、何故あなたがそれを！？」

「まだ聞かされていなかったのか・・・昨日づけ、いや、正確には今日づけで暫く風紀委員（ジャッチメント）１７７支部を手伝う事になって派遣されたんだが・・・」

「派遣！？そんな話は聞いていませんのよ」

「見た感じじゃ、貴方はその１７７支部の人の様だ。どうせなら向こうで話をした方が早いだろう」

「そうですわね。ご案内いたしますわ」

プロローグ（後書き）

いきなりですがアンケートです。

タイトルになっている空間重力操作のカタカナ言葉を募集します。

自分ではどうもいいものが思いつかないので・・・

同時に感想もお待ちしております。

再会（前書き）

今回セリフばっかです。

再会

支部へと戻った二人。

「おかえりなさ～い」

「はぁ・・・初春、どういう事か説明していただきたいですの」

「？何がですか？」

「惚けないでほしいですの。急遽こちらに派遣される新人が来るだなんて聞いてないですのよ」

「どちら様なのですか、その方は？」

「あぁ・・・入ってきて宜しいですわよ」

ドアを開けて入ってきたのは・・・

「！！秋月さん！？」

「・・・お前、初春か？」

「はい！」

「そうか。久し振りだな」

「初春、知り合いですの？」

「はい。知り合いというより・・・幼馴染です」

「幼馴染？この方が？」

「あぁ。学園都市に来る前のほんの数年だけだったけど。ハッカーの中で守護神（ゴールキーパー）何て言われてそいつの事を調べてもしやとは思ったが・・・ホント懐かしいな」

「そうですね」

「・・・お取り込み中申し訳ありませんけど、初春、事情を」

「だから私は受けてませんって！」

「バックアップはあなたの担当でしょう？」

「そんな事言われても・・・」

そこへ、

「あら、お疲れ様ねぇ」

と固法美偉が入ってきた。

「固法先輩！」

「あら、貴方が臨時でここに派遣されてきた？」

「えぇ。あぁ、自己紹介がまだでしたね。僕は秋月瑶。こちらの支部に派遣されて暫くここで風紀委員（ジャッチメント）として活動する事になりました。

どうぞ宜しく」

「えぇ、こちらこそ」

「ふぅ。流石に夏なだけあって外は暑くて敵わないですね」

「あっ、冷蔵庫に冷たいものありますけど何にしますか？」

「う～ん、別に何でもいいけど・・・というよりその位自分でやるよ」

「でも、秋月さんは先輩ですし・・・」

「えぇ！？この方が初春の先輩！？」

「一応そういう事になるんでしょうか。先に学園都市に入って以降、こうして会うのは今が最初ですけど。それに伴って高校も別の所へ転入という事になりました」

「そういえば秋月さんて今年から高校生でしたよね」

「あぁ」

「仲がいいです事」

「な／／／／／／べ、別にそういう事じゃありませんから！ね？」

「ん？何が？」

あまりに無神経な反応に初春はそっぽを向いてしまった。

「初春～・・・初春～？何でそんな急に御機嫌斜めになるんだよ」

「知りません！」

「？？？」

背をむきながら固法と白井は・・・

「（あちゃ～、やっちゃったわね秋月君）」

「（女性に対する気遣いというものが無さ過ぎますの。まるで・・・お姉様に付きまとうあのウニ頭類人猿の如く！）」

「（ウニ頭類人猿？）」

「（え・・・あっ、こっちの話ですの）」

そこへ、一本の電話が。

「はい・・・はい。分かりました。スキルアウトの暴走が第１０区で起きている様です」

「１０区でですの！？」

「バカは始末に負えないってことか」

「裕著な事言ってる場合じゃありませんの。そうですわ、この際ですの。貴方の力、見せてもらいますわ」

「・・・分かったよ。ここの支部に来てからの初陣と行きますか」

再会（後書き）

この作品に関してはまだ調子が出てないので短めですが調子が出てきたらもう少し長くします。

感想等お待ちしております。

初陣

裏路地。学園都市に次々と建つ建物には必然的に出来てしまうものだ。スキルアウトはその裏路地に能力者を一人にして囲い、日ごろの憂さ晴らしという名目のもと暴行やら何やらを行っているのである。

「おらぁ！」

「ぐふっ！」

「オイオイこんなもんかよ。今まで散々俺達をバカにしやがって！」

「随分とやってますね」

「ホント、この類の事件というのは数が減る傾向がないから困りものですの」

「愚痴を言っても仕方がない。さっさと終わらせよう」

「そうですわね」

そのままスキルアウトが群がる裏路地へと入る。

「んぁ？何だお前らは？」

「風紀委員（ジャッチメント）ですの。通報に在りました通りですのね」

「なんだまた風紀委員（ジャッチメント）かよ。痛い目に遭いたくなけりゃとっとと帰りな」

「帰りたいからさっさとここからいなくなって欲しいんだけど」

「あ？何だ隣にいるその童顔は？」

「（ピシッ）ど、童顔！？」

「お、ホントだ。オトコ女っつうのは聞いたことあっけど、その逆がいるとわねぇ・・・」

「（ブチッ）・・・12秒だ」

「は？何ですの？」

「12秒でコイツらのカタを付ける。白井、金属矢の準備だけしておけ」

「えっ・・・ちょっ・・・あな・・・」

「おらァ！まとめてこいや！」

「でけェ口叩きやがって！おい、やっちまえ！」

一斉にかかってきた。

一人目の拳をかわして腹部にたたき込み、金棒を振り上げた者を逆に掴んで金棒の端を掴んでトコに背中から打ち込み、背後にいたヤツに回し蹴りをきめた。

「（な、なんなんですのこの方。スキルアウトに対する完璧な戦闘。まるで・・・あの方みたいですの）」

あの方。それは白井達の先輩であり、かつて能力者でありながらスキルアウトの一つである「ビックスパイダー」に所属していた固法の想い人、黒妻綿流の事である。体格や戦闘の方法こそ全くの別物だが、その姿勢は何処か黒妻を彷彿とさせた。

そして最後の一人をブッ倒したその瞬間、秋月は左手の腕時計のストップウォッチを止めた。

「・・・0、47秒もオーバーか」

「・・・意外とやりますのね」

「褒め言葉として受け取っておくよ。じゃっ、後は頼むぜ」

「はいはい、ですの」

そして床に倒れているアンチスキルを拘束した白井。

「すぐに警備員(アンチスキル)が来るそうですわ」

「そうか・・・こんな事しなくても本拠地潰しちまった方が楽に思えるんだが、そう簡単にはいかないのが現実か・・・」

「そうですわね。戻りますわよ」

「あぁ・・・」

その時、白井の携帯が鳴った。

「はい、白井ですの」

「白井さん。今いる近くの養護施設近くに爆発物が仕掛けられているとの通報が・・・」

「爆発物!?それは警備員(アンチスキル)の管轄ではなくて?」

「それが、今別の件に部隊が集中してて、こちらに人員を裂けられない状態らしいんです。ですのでこちらで対応してほしいと・・・」

「はぁ、まったく・・・分かりましたわ。すぐそちらに向かいますの」

「宜しくお願いします」

白井は初春との通話を切る。

「指示された場所に行くには空間移動（テレポート）の方が早いでしょう。行きますわよ」

「そうだな」

白井に背中に手を当てられた秋月は次の瞬間、白井もろともその場から姿を消していた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4158s/

とある風紀委員（ジャッチメント）の空間重力操作

2011年10月7日02時33分発行